

〔シンポジウム「大隈に手紙を寄せた人びと——大隈重信へのまなざし」〕

大隈重信の政党指導

——大隈宛書翰の翻刻を受けて——

五百旗頭 薫

はじめに

早稲田大学大学史資料センターにより『大隈重信関係文書』全一一巻（みすず書房、二〇〇五～二〇一四年）が刊行されたことは、まことに喜ばしい。この資料集が歴史研究に与える恩恵は、深くかつ多岐にわたるであろう。その全てを語ることは私の力に余るが、大隈財政の研究に比べて、大隈系政党（立憲改進黨、進歩党、憲政党（旧進歩党系）、憲政本党、立憲国民党、立憲同志会）の研究はまだ相対的に少ないので、より端的に受益するところがあると思われる。そこで、この資料集が今後の政党史研究に持つ意義を論じて、お祝いにかえたい。^①

そもそも、戦前の政党の歴史を戦後の歴史学はどう考えてきたか。十九世紀の第4四半期を中心に考えると、ごく大雑把に言って、三つの潮流を考えることができる。それぞれ、今も参照すべき成果を含んでいる。また、複数の潮

流を意識した研究者がいることはもちろんである。あくまで便宜的な区分として了解されたい。

政党史研究の三つの潮流

第一は、政府と社会を対立させて見る。なぜ軍国主義が台頭し、戦争になってしまったのかの探究が、戦後の歴史研究の痛切な出発点であったから、当然であろう。政府による抑圧と、それに対する社会の側の抵抗を描く。自由民権運動研究にはこの傾向が強い。大隈系の立憲改進黨はより穏健とみなされ、研究の蓄積が遅れた。伊藤隆、大日方純夫、安在邦夫に代表される成果はあるが、自由党研究よりははるかに少ない。⁽²⁾自由党が与党化すると研究する意義が低下するので、初期議会期以降への関心は弱まる傾向にある。

第二は、政府と社会の一致をより重視する。国の発展に向けた利害とアイデアは大体一致しており、あるいは一致する傾向にあると考える。この一致に基づいて選ばれた政策が客観的に妥当であったかどうかは開かれた問題であるが、研究が蓄積するにしたがつて、その合理性を評価する傾向が強まるようである。鳥海靖による通史が典型である。⁽³⁾初期議会期について、穏健な憲法運用の形成を描いた佐々木隆や伊藤之雄がいる。⁽⁴⁾佐々木のように薩派や温和派が新たに視野に入る一方で、大隈系政党は野党化していくので、ここでも研究の主題にはなりにくい。

第三は、政府レヴェルの対立軸をより重視する。革命の希求ではなく、政府ないし憲法体制への順応でもなく、ある程度具体的な政策を持った野党による政権交代の可能性が追求される。そうすると、大隈重信が最も重要な存在になる。大隈は財政のプロであり、明治初年の外交立ち上げの功労者としての権威を持っていたため、野党側の政策形成の核になり得たからである。私が僅かながら貢献したのは、この潮流においてである。⁽⁵⁾

もつとも、ここまで説明した限りでは、第三の潮流というのは潮流として完結できていないように思われる。国政レヴェルでの政策対立を描くには成功しても、政策対立がなぜ生まれてくるかについて十分な説明ができていないからである。

第三潮流の基礎を求めて

そのことを説明するために、先に「複数の潮流を意識した研究者もいる」と述べたことをもう少し具体的に考えてみよう。

例えば坂野潤治は、第一の潮流に分類してよいくらい、政府と社会との緊張関係に敏感である。だからこそ、両者が調和してしまう原因を深く詮索し、『明治憲法体制の確立』は第二の潮流を先導した。⁽⁶⁾当然、この調和が破れる瞬間への関心も並々ならぬものがあり、時の行者のように「国家構想」⁽⁷⁾の分岐・競争をたどった『近代日本の国家構想』⁽⁷⁾や一連の通史は、第三の潮流を活性化している。

政府と社会が、元老や藩閥によってよりもっとシステムティックに媒介される条件を考える上では、三谷太郎が参考になる。第二の潮流の関心事たる、自由民権運動を母体とする自由党から統治政党たる政友会への変貌の説明として、三谷の論文「政友会の成立」は今日でも言及される。⁽⁸⁾とはいえ政府と社会、あるいは広く国家・政治と社会との関係を問う試金石として、文学や学問といった非政治的領域が国家的価値からいかに自立するかも問題としているので、⁽⁹⁾第一の潮流と無縁ではいられない。さらに政府と社会との媒介ぶりは複数考えられるのであって、例えば、政友会を指導した原敬と、原を批判した知識人吉野作造のヴィジョンは異なるのだが、三谷は双方を詳細に論じてい

る。⁽¹⁰⁾ 第三の潮流も社会への視野を持たなければならず、しかも複眼的な視野を持つことで対立の発生を説明しなければならぬ、と説いているかのようである。

第三の潮流を基礎付けようとすると、しかし、またしても大隈系政党が躰きの石となる。政党が自由民権運動鼓吹にかわって地方利益の糾合に努めるようになった趨勢は、有泉貞夫の古典的著作が描いている。⁽¹¹⁾ 自由党・政友会系がこれに相対的に積極的であつたのだとすれば、相対的に消極的であつた大隈系政党の社会的基盤を正面から説明するのが難しいのである。

案の定、大隈系政党の社会的基盤については諸説ある。開発から取り残された後進地域であるという説が有力であつた。⁽¹²⁾ だが、犬養毅の勢力圏であつた岡山県南部のような先進地域もあるという研究が登場している。⁽¹³⁾ 二〇世紀に入ってから立憲同志会やその後進（憲政会・立憲民政党）には都市化が有利に働くという説は以前からあつたが、全国的な傾向としては、ライヴアルの政友会にとつて比較的に不利であるということしかいえない、との指摘がある。⁽¹⁴⁾

そもそも、ある地域なり集団なりが大隈系政党を支持したとして、それは何を支持したことを意味しているのか。大隈系政党の歴史は複雑で、主要な経済政策だけを取り上げても、地租軽減や地租増徴反対と、金本位制に基づくレッセフェールとの矛盾を、一八九七年の金本位制導入後はかかえている。⁽¹⁵⁾ しかも大正政変時に、立憲同志会への参加組と、立憲国民党への残留組とに分裂している。以前、私は衆議院議員選挙で大隈系政党の代議士を全国平均よりも多く輩出した道府県の通時的なりリストを作ってみたが、支持の内実として四つか五つの類型を用意しなければならないことに気付いた。⁽¹⁶⁾

現状では、二大政党の社会的基盤について、全国的に妥当する差異は断定できないのかもしれない。第一の潮流ならば政党政治の不良を、第二の潮流ならば複数政党政治の未熟を述べればよいのかもしれない。第三の潮流はそうは

いかず、社会的基盤に差異がないのに、国政レヴェルの政策対立がなぜまがりなりにも成立したのかを説明するといふ宿題がある。これについて私は、「進歩政党 統治の焦点」と題して、大隈系政党において社会からの入力を制御したり誤伝達したりした装置として犬養毅、そして立憲同志会・憲政会・立憲民政党において同様の機能を受け継いだ安達謙蔵、の政治的役割を論じたことがある。⁽¹⁷⁾ 固有の社会的基盤について速断するよりも、たしからしいことを述べられたと思っている。

メゾレヴェルの調査とそのための装備

とはいえ、社会的基盤の差異について語り得ない、と決あきらめるのも短慮である。「進歩政党 統治の焦点」を執筆した動機は、大隈系政党の主張や盛衰といったマクロレヴェルではなく、地域の政治や社会といったミクロレヴェルでもなく、両者をつなぐメゾレヴェルについて知りたいということであった。大隈の側近―犬養はその主要な一人である―から、地域のリーダーやアクティブな黨員までを含むネットワークである。このネットワークの性格が分かれば、マクロレヴェルとミクロレヴェルをつなぐ困難に立ち向かう準備となるであろう。

大隈に寄せられた膨大な書翰は、そのための最も重要な史料である。目録は、主要部分について、一九五二年に早稲田大学図書館が『大隈重信文書目録』を編纂した(同『補遺』は一九七五年)。しかし大隈宛書翰の膨大さからすると無理もないのはあるが、同じ差出人のものをいくつか並べた後で別の差出人に移り、やがて元の差出人に移るといふ気まぐれなスタイルであり、年代推定の誤りも目立った。

77
翻刻としては日本史籍協会による『大隈重信関係文書』全六巻にお世話になった。⁽¹⁸⁾ しかし年代推定や字句解説の誤

りに加え、政党指導に対する関心が相対的に弱かった。立憲改進黨を結成した一八八二年以降というのは、大隈の人生（一八三八―一九二三年）の半分を占めるのだが、その時期の書翰は、第五卷・第六卷にしか収録されていない。

これでは困る。政府内の大隈を研究したのであれば、誰が政策過程に参加していたかの推定が容易なので、書翰を系統的に調査しやすい。だが政党指導となるとそうはいかない。どのような黨員やシンパが、いつ文通して来るかは予測困難である。名前だけ見ても何者であるのかすぐには分からないことが多い。翻刻から漏れ、目録でも当りがない、変化球の連続なのである。

この度、早稲田大学史資料センターが純粹な礼状・挨拶状の類を除く書翰の網羅的な翻刻に踏み切ったことで、これらの問題が解消された。それでは、これを活用して、メゾレヴェルについてどのようなことが言えるのであろうか。

解党の危機に臨んで

一八八二年四月一六日、大隈は立憲改進黨を結成し、自ら総理に就任した。拙著『大隈重信と政党政治』で繰り返し指摘したように、大隈の政治戦略とは、政党を育成して藩閥政府に圧力をかけることと、自らの主張の穩健さや実現可能性をアピールして政権復帰を実現することとの、二元連立方程式から導き出されるものであった。政党の外に通用する穩健さや実現可能性というのは、自由民権運動の系譜に立つ政党の理念とは緊張関係にある。実際、これに対する批判と擁護とが、大隈宛の書翰の少なからぬ部分を占める。

したがって、政党の育成において大隈は、真剣さや一貫性に欠けるところがあったといえる。大隈系政党は、よく

存続したものである。いかに存続し得たかが問題である。

一八八四年、松方デフレと激化民権の中で、自由党は解党を決議した（一〇月二九日）。改進黨の組織も低迷しており、党の名簿を廃止するという提案をきっかけに、解党の是非をめぐる対立に至った。この対立はしかし、一月十七日に大隈総理以下、幹部数名が脱党することで収拾された。尾崎行雄が後年、「成程是は解党でも非解党でもないですね。そんなことの極めて名人であつた」と回顧している⁽¹⁹⁾。

どんなことの名人であつたか、尾崎は詳しい説明を与えない。いざ説明するとなると骨が折れ、かつ改進黨関係者の常識であつたのかもしれない。

大隈らが脱党する直前に、小野梓門下の山田一郎が大隈に長文の書翰を送っている⁽²⁰⁾。山田の助言において前提となっているのは、解党派と非解党派を統合する力が大隈にはないということである。そこで山田は、論争に決着をつけるのではなく、ただ論争そのものを打ち切ることを提案する。争いの当事者は中止の理由が分からず、「憂慮」するというのが、山田の狙いである。

今日之事態にありては我党之為め国家之為姑らく解党説之当否を弁明する事を中止被成断乎として不被為動候得者、双方之論者如何なる儀に而中止相成候哉と憂慮可仕候。

大隈の不十分な指導に困惑する点で、解党派・非解党派が感情を共有でき、対立が二義的になるということである。その後で大隈が非解党論者、河野が解党論者を個別に慰撫すれば、「不了解ながらに議論自然と薄らぎ可申と被存候」と山田は予測してみせる。

さらに党員が憂慮を確認し、共有するための懇話会を開催させれば何よりである。ここで大事なのは、大隈が公式

には懇話会を認知していない（決而閣下之御知了なき者）ということである。こうした場で前途を協議させれば、党員は「和合」するであろう。

山田にとって、改進黨の「和合」とは、大隈の「御了知なき」まま、党員が「憂慮」し、「不了解ながらに」達成するものなのである。

山田は改進黨の問題を「アリストクラシーの弊害よりデモクラシーの逆烈を醸し来り候哉」と指摘している。山田が回復しようとした「アリストクラシー」は、抑圧するのではなく、放置するアリストクラシーであろう。その下で実現しうる「デモクラシー」とは、大隈による棄民のデモクラシーである。

それは山田一人を超えて、改進黨の幹部層においては一定の正統性を備えた考え方であったように思われる。争う双方を啞然とさせ、心機一転させるためには、憂慮よりも衝撃を与えた方が良い。大隈らが脱党までしたのにそういう意味があるのだとすれば、山田の発想の延長線上にあった行動といえよう。脱党後も、大隈は改進黨との非公式の関係を維持したのである。

民権派のダイナミズム

もちろん、コミットメントの乏しい政党指導は組織拡大にはマイナスである。停滞した組織は棄民の連鎖を生む。

改進黨が伝統的に「屯田策」を採り、九州を顧みなかったため、九州の同主義者は自由党に入るしかなかった、と熊本出身の代言人、安武千代吉は苦言を呈している。⁽²¹⁾ 事実の一端を言い当てているであろう。また、後述のように、改進黨が全体として才子の集合として疎まれる事情の一部にはなっているのである。

改進黨にとって、国会開設前夜の大同団結運動や、初期議會期の民党連合というのは、たとえ本来の目的を達成できないうちでも、党外のシンパに再提携の触手を伸ばす好機であった。少なくとも自由党の中には、そうした警戒があった。その代表格である星亨が一八九三年秋、九州に遊説しようとした際、大隈と親しい秀島家良や江藤新作は、佐賀県・長崎県の民党勢力を、遊説謝絶の方針で取りまとめた。これを押しつけて星が来遊し、現地の自由党が屈して演説を認めたことで、江藤は自由党を分裂させる好機を見出したと大隈に報告している⁽²²⁾。

棄民政策は、本来の国境を曖昧にすることで、民権派政党的の接近と反発というダイナミズムを生み出したのである。

対外硬派のダイナミズム

そしてこのダイナミズムは、民権派の外部にも波及した。改進黨と自由党の関係が悪化し、民党連合が崩壊した一八九三年以降、大隈らが対外硬派や薩派との連携に活路を見出すようになると、大隈と改進黨が一心同体ではないことがプラスとなった。

この連携を促進するのに貢献したのが、民友社の徳富蘇峰であったが、蘇峰は大隈に対して以下のように露骨に改進黨を批判し、「外人」に門戸を開くよう要求できた⁽²³⁾。

正直に申せは閣下の下にある改進黨諸君は概して其の眼孔狹窄規模淺少、以て閣下の大精神を發揮するに足らず。

日清戦争終結の直前には、改進黨との親密さに反比例して大隈の人望は高まるとまで断言している⁽²⁴⁾。

申上候迄も無之候得共、閣下と改進黨との関係は寧ろ余り密接ならざる方閣下の御志望を達する点に就ては可然と奉存候。改進黨の大隈伯として天下に認識せらるることは決して天下の人才を周囲に吸収する所以にあらず。天下の大隈伯として認識せらるる時に於ては誰れか能く之に敵せん、誰れか能く之を禦かん。約言すれば閣下の勢力は改進黨との距離と反比例するものにて候。

上記の引用において蘇峰は、申し上げるまでもないことだが、と前置きしている。新奇な意見ではなかったのである。当然ながら、改進黨員からは、「我党を置き去りに為すなからんことを」といった懇請ないし牽制が寄せられるのであった。⁽²⁵⁾

一八九六年三月一日、改進黨や立憲革新党など、民党勢力と対外硬派の一部とが合体して、進歩党を結成した。改進黨の議席からは倍増であり、自由党と同様、衆議院の約三分の一、一〇〇議席前後を占める政党となった。九月一日に薩派の第二次松方正義内閣が成立すると、大隈は外相に任ぜられた(同三日)。進歩党は、この松隈内閣の与党となった。

やはり民友社の人見一太郎がその直後に送った書翰⁽²⁶⁾は、進歩党の結成が大隈の改進黨色を薄め、政権復帰に向けたアリバイになったとして、「旧改進黨なるもの名目に於て消滅して進歩党といへる茫漠の中に今夕したるによれるもの亦少なからずと存申候」と解説してみた。

人見によれば、大隈のサロンに改進黨関係者だけが出入りしている状態では、天下は望めない。改進黨に多い才子たちは大局に暗く、「能く策略を談すれとも其実は策略に迂なり」という。進歩党を統率するためにも、旧改進黨以外の新参者を厚遇するのが賢明である。

棄民政策には合理性があつたのかもしれない。自らの子飼いを冷遇すると、新規参入者に厚遇の期待を抱かせるこ

とがある。「寧ろ頼母しき人物は遠方に在るへし」といった人見の意見に対して、開かれているように見えるからである。

旧改進黨系の怨恨

それは論理的必然ではないし、必ずしも歴史的現実でもないように見える。改進黨の幹部・党員の陳情や、それがかなえられたことへの謝辞が、大隈には多数寄せられているからである。それでも大隈の指導スタイルには古参に薄く新参に篤く見えるところがあり、政党の合同・拡大にとってプラスの力学を生んだのである。

他方で、これによって実現した政党の統合や、政権の維持にはマイナスに働いたのではないか。

一八九八年六月二日、進歩党が自由党と合同して憲政党になり、これを与党とする隈板内閣が同三〇日に成立する。党内からは大隈に対して、任官要求が殺到する。この競争において、敗者意識が最も強いのは、旧改進黨系であった。

任官候補の呼び声があつた大津淳一郎の大隈宛書翰によれば、そもそも旧進歩党系が旧自由党系に比べて不遇であり、その旧進歩党系の中でも旧改進黨系は不遇であつた。代議士数で比べれば旧改進黨系が七三名と、旧革新党系四九名よりも多数を擁しているにも関わらず、旧改進黨系は総理大臣（大隈、兼外務大臣）、文部大臣（尾崎行雄、後に犬養毅）の他に箕浦勝人（通信省）次官、高田早苗（文部省）勅任参事官、肥塚龍（東京府）知事を出すに過ぎず、旧革新党系は農商務大臣（大石正巳）、司法大臣（大東義徳）の他に神輦知常法制局長官、武富時敏内閣書記官長、中村弥六（司法省）次官、柴四朗（農商務省）次官、志賀重昂（外務省）勅任参事官、菊池九郎（農商務省農務）局長、竹内正志（農

商務省水産 局長、金尾稜巖（富山県）知事、萩野左門（栃木県）知事を輩出している。⁽²⁷⁾

この苦情には誇張があり、旧改進黨系とも旧革新党系ともいえない中立系の代議士が少なからず旧改進黨系に算入されている一方で、中立系からの任官者（神輿・志賀・竹内・金尾・萩野）が旧革新党系に含まれている。

任官の野望がどれほどあつたかはさておき、大津には大隈の同情を強く求めたい事情があつたのかもしれない。平渦巻く旧改進黨系は、大隈直参でありながら真つ先に分派活動を行つており、それについての弁明もしなければならなかつたのである。同じ書翰で大津は、「決して脱党や謀反などするものにあらず」と記し、また「首相の如何なる逆境に陥るも進退を共にせざるを得ざるは乃ち此の不遇の輩なり」と訴えている。

塩入太輔はより恫喝的であり、現状のままであれば党大会で内閣不信任を決議し、党出身閣僚を除名することも辞さない⁽²⁸⁾と大隈に警告している。

この時に塩入は、大隈を徳川家康に譬え、旧改進黨系を忠義の三河武士になぞらえている。

伯には改進黨員を御忘れ無之様願上候。徳川家康の天下を取りたるは三河武士の不撓不屈に依る。伯の今日あるは改進黨の團結鞏固なる効に依る。然るに伯は改進黨を御忘れ相成りたる哉に見受けらるる廉なきにあらざ。時々⁽²⁹⁾は記憶御喚起相成度候。

この引用を読む限り、塩入も大津のような泣き落としを忘れていたわけではない。三河武士の譬えは他にもみられるが、しかし賢明ではなかつたかもしれない。家康の天下取りといえ、三河以来の譜代を冷遇して見せることで、関ヶ原以来の外様大名を糾合したことを想起させるからである。先に見た人見一太郎の書翰は「何かにつけて譜代と外様とは御加減必要と存申候」と忠告し、念入りにも譜代と外様の石高まで例示しているのである。

周縁のメシア

大隈が正確にどのように石高を配分したかは、大隈宛書翰を通読しても謎のままである。断片的な情報の集積は、ついには断片を超えないことがある。だが、断片的という印象こそ正解に近いのかもしれない。大隈系政党の傍流であつても、あるいは党外であつても、何らかの縁を得て、大隈から留学・就学の支援や就職・縁談の斡旋、会社経営への助言や援助などを受けた者の礼状は枚挙に暇がない。

このような行為は、大隈の財政支援を仰ぐ大隈系政党からすれば、不公平で気まぐれなものであつたはずである。だが大隈が遠い所から自らを気にかけ、支援してくれるという期待を、社会の各方面に散乱させた。「寧ろ頼母しき人物は遠方に在るへし」とは前出の人見一太郎書翰が大隈の人材登用に助言したものであるが、それ以上に大隈への期待として拡散し、大隈が国民全体の発展と啓発に尽力しているというイメージと共振したであろう。このことは大隈系政党の盛衰を超えて大隈人気を支え、大隈個人の命運を超えて政党政治にダイナミズムを付与したのである。

この意味でも、大隈にとつて政党の公式の役職に就くことは、権力の獲得に劣らず自由の喪失であつた。ここでの自由が、国民教育だけではなく、伊藤博文との和解や薩派への調略、自由党への介入や対外硬派への操縦の間をつるうためのものであつたとしてもである。

一八九八年一〇月から翌月にかけて、隈板内閣が短命に崩壊し、憲政党が分裂した。その後、旧自由党系（憲政党）は山縣有朋、ついで伊藤に接近し、一九〇〇年九月一五日には伊藤を総裁に迎えて政友会を結成した。対抗するよう旧進歩党系（憲政本党）も二月一八日に大隈を総理に推戴する。一八八四年以来、久々に公式の総理となつたの

である（一八九一年末に改進黨の代議総会会長に就任したことはあるが）。

この時の角田真平の助言が尽している。党内からの注文が増える。人気を損ねぬよう適切な人物を登用せよ。安請け合いするな。一度請け合ったら実行せよ。⁽²⁹⁾

可然人を慥に見立置き人氣に障らぬ様、又ずんずん引受けぬ様、又引受し以上は違約せぬ様被遊度候。

俳人を兼ねた政治家らしく、無駄がない。

改革派と非改革派の事情についての仮説

大隈総理の下でも憲政本党の党勢は振るわず、苦節の時代が一〇年ほど続く。この間、悪戦苦闘、孤塁を守衛する先頭に立っていたのが、犬養毅である。だがこの犬養が、角田のいう「可然人」であったかは、評価の大きく分かれるところである。本稿からはどのような評価が可能であるかを、最後に述べておきたい。

当時、党内は改革派と非改革派との内紛に陥るが、これは路線対立であると同時に、犬養への好悪が生んだ亀裂でもあった。

まず非改革派とは、民党路線の維持・継続を訴える勢力で、犬養が突出した指導者であった。

これに対して改革派は、詳細は省くが、局面打開のために政友会ないし桂太郎らへの接近を模索する勢力である。

当初は鳩山和夫が主導していた。大隈では政権復帰が困難であるという不満とも連動しており、一九〇七年一月二〇日に大隈は総理を辞任している。鳩山が一九〇八年一月一九日に脱党して政友会に移った後は、改革派は次第に大石

正巳を中心に活動するようになる。

だが改革派の特徴は多士済々にあり、高田早苗・加藤政之助・箕浦勝人といった改進黨の初期からの幹部や、大隈と同じ佐賀県出身の武富時敏といった側近が含まれている。

憲政本党が他の小会派を糾合して一九一〇年三月一三日に立憲国民党を結成した後も、両派の対立は収束せず、豪農民権の伝説的指導者であった河野広中や、一八九八年末に進歩党を脱党するまで長く大隈系政党を支えた雄弁家の島田三郎までもが、反犬養陣営に加わる始末であった。

大正政変の際、桂太郎が新党結成を提唱すると、一九一三年一月下旬、大石・河野・島田・箕浦・武富らは国民党を脱党し、桂新党への参加を宣言した。大隈はこの新党（立憲同志会）の成立を祝福し、つまり是非政友会系の主流となる政党との関係を保持した。

犬養は国民党の分裂をもたらした立憲同志会への敵愾心を抱き続けたが、党勢の回復には成功せず、一九二五年五月一〇日に革新倶楽部（国民党の後身）を政友会と合同させ、政界引退を表明したのである。その後、政友会総裁・総理大臣として復活した経緯については本稿では触れない。

大隈系政党が低迷した二〇世紀初頭、なぜ犬養には多くの敵がいたのか。この時期については大隈宛書翰が少なくなるので、ここまでの考察を踏まえた仮説的なことしか述べられない。

犬養の狷介な性格や寸鉄人を刺す毒舌は無視できない要素だが、さておくとする。本稿の冒頭に論じた、政党史研究の第一の潮流であれば、時代の墮落を理由に挙げるかもしれない。第二・第三の潮流であれば、二大政党化の時代に犬養が乗り遅れたと説くであろう。第三の潮流をメゾレヴェルに拡張した本稿からは、何が言えるであろうか。

またしても一八九六年の人見書翰に戻るならば、改進黨の中で「唯一の犬養毅を除くは一の感心すべき人物なし」

と、犬養だけは評価していた。ただの才子にはない資質があると評価していたことである。

犬養は大隈の門下らしい政策志向と、大隈にない組織志向とを兼ね備えた政治家であった。田口卯吉と保護貿易の是非をめぐる論争したことのあるエコノミストであるが、軟派・自由党・薩派・対外硬派・貴族院との提携工作にも従事した。改革派の攻勢の前に、大隈を擁護する唯一無二の忠臣に見え、党務に―改革派に妨げられない限りは―精励した。才子であれば直ちに矛盾を来すのであろうが、犬養は饒舌を封印し、本質や意表を衝く言葉のみを吐く―だから寸鉄人を刺してしまうのであるが―ことで、矛盾も封印し得たように見える。⁽³⁰⁾

これに対して改革派には、武富や加藤といった経済政策通や、高田や箕浦といった党外への多数派工作に貢献した幹部がいた。⁽³¹⁾ 島田や加藤をはじめとする改進黨出身者には、棄民された記憶もあつたであろう。河野であれば、改進黨全体の才子ぶりをよく記憶していたであろう。大隈系政党の歴史に刻印された異なる傾向が異なるアクターに分かち持たれているから、多頭的な態勢が可能かつ必要であつたのではないだろうか。

肝心の大石は、大隈系政党に参加したのが進歩党結成時からである。大石の言動には、国会開設前夜の大隈宛書翰に「退て静かに諸党派の綱領目的を比較せは、敢て其間に著しき反対を見ることなき而已ならず、言葉棄てて意を推せは各党同一の点に帰著する者の如し」と記したような、改進黨員が口にしなさそうな達観や、別の大隈宛書翰に記した警句「自ら経綸を立てて勇進する者は衆人之に従ひ、経綸なくして衆愚を調和せんとする者は終に其衆を保つを克はずとは政治社会の定法⁽³³⁾」にうかがえるような逆説の妙があり、禪に凝つたもその方面に磨きをかけようとしたのかもしれない。大石は矛盾を調整したり野放しにしたりはできたのであろうが、封印することはできなかつたであろう。

犬養は自らの人格の中に矛盾を封印することで、自らの政党の前途も封印してしまつたのかもしれない。黨員を棄

民するだけでなく、それがもたらす矛盾を棄てて顧みないのが大隈系政党のダイナミズムであつたからである。その生理に則つて、大隈は最後に犬養をも棄民したのかもしれない。

おわりに

本稿では、政党史研究の三つの潮流から論を起こした。第一は政府と社会の対立を、第二は政府と社会の協力を、第三は政権をめぐる競合の形成を重視したものである。あえて戦後史の文脈に引きつけければ、第一の潮流は自民党政権への批判と、第二の潮流は自民党政権による果実の評価と、第三の潮流は政権交代を目指した政治改革と、緩やかに連帯しているであろう。本稿では、大隈宛書翰によつてこの第三の潮流を發展させる可能性を探つた。

現在もそうであるように、第二党が成長し、安定した政権を確立することは容易ではない。指導者への批判は容易であるが、メゾレヴェルの不全を研究しなければ生産的な指針は得られないであろう。

大隈系政党も、全国的に強固な組織を發達させることに苦勞したようである。むしろ大隈の政党指導の知恵は、冷淡に見えることで弱い組織に団結をうながし、既存組織が弱いことで他の政党・会派を誘引した点にあつた。さりとて大隈が社会から乖離していたわけではなく、不規則な紐帯や恩恵を張り巡らせていた。

この偏在が遍在に見えるように工夫してははずであり、これを理解するためには大隈宛書翰だけでなく、大隈本人の言説や、幹部による補完的な行動・演出に分析を広げなければならない。

とはいえ、『大隈重信関係文書』の意義がここに尽きたわけではない。本稿で述べたようなことは、『大隈重信関係文書』の活用としては序の口であり、点と線をつないだ未熟な考察に過ぎない。さらに精読すれば、メゾレヴェルの

大隈系政党の輪郭や触手がより明確に見えて来るであろう。各地域の政治や社会の動向をこれと組み合わせれば、大隈系政党の社会的基盤についてよりたしかなことが言えるであろう。

大隈宛書翰が提供する情報は膨大であつて、まだまだ謎めいている大隈系政党を解明するための、汲めども尽きぬ知識の泉である。編纂と刊行に従事した各位に、あらためて敬意と感謝を表したい。

註

- (1) 本稿の原型となつたのは、刊行を記念したシンポジウム「大隈に手紙を寄せた人びと——大隈重信へのまなざし」(早稲田大学、二〇一五年一〇月二日)における講演である。但し、その際に時間の制約のため述べられなかつた論点と、講演後のパネルディスカッションで得た気付きとを、本稿では付け加えている。常体を採りながら口頭発表の調子が残っているが、この資料集にうながされた考察を直截に伝えるには便利と思ひ、そのままにしている。この資料集を引用するに際しては、編者・出版社・出版年を割愛する。
- (2) 伊藤隆「明治10年代前半に於ける府県会と立憲改進黨」『史学雑誌』第七三巻第六号(一九六四年六月)、大日方純夫『自由民権運動と立憲改進黨』(早稲田大学出版部、一九九一年)、安在邦夫『立憲改進黨の活動と思想』(校倉書房、一九九二年)。
- (3) 鳥海靖『日本近代史講義——明治立憲制の形成とその理
(10) 原について三谷、前掲『日本政党政治の形成』、吉野に
- 念(東京大学出版会、一九八八年)。
- (4) 佐々木隆『藩閥政府と立憲政治』(吉川弘文館、一九九二年)。伊藤之雄『立憲国家の確立と伊藤博文——内政と外交一八八九—一八九八』(吉川弘文館、一九九九年)。
- (5) 五百旗頭薫『大隈重信と政党政治——複数政党制の起源』(東京大学出版会、二〇〇三年)。
- (6) 坂野潤治『明治憲法体制の確立——富国強兵と民力休養』(東京大学出版会、一九七一年(一九九〇年))。
- (7) 坂野潤治『近代日本の国家構想一八七一—一九三六』(岩波書店、一九九六年(岩波現代新書、二〇〇九年))。
- (8) 三谷太一郎『政友会の成立』『岩波講座日本歴史16近代3』(岩波書店、一九七六年)。後に同『日本政党政治の形成——原敬の政治指導の展開』(東京大学出版会、一九六七年(増補一九九五年))に収録。
- (9) 三谷太一郎『大正デモクラシー論——吉野作造の時代』(中央公論社、一九七四年(東京大学出版会、二〇一三年))。

- ついで三谷、前掲『大正デモクラシー論』。
- (11) 有泉貞夫『明治政治史の基礎過程―地方政治状況史論』(吉川弘文館、一九八〇年)。
- (12) 阿部恒久『近代日本地方政党史論』(芙蓉書房出版、一九九六年)。
- (13) 久野洋『明治中期における進歩党系勢力の地域的基盤』『日本史研究』六二二号(二〇一四年五月)。
- (14) 川人貞史『日本の政党政治一九〇―一九三七年―議会分析と選挙の数量分析』(東京大学出版会、一九九二年)一六九―一七五頁。
- (15) 五百旗頭、前掲『大隈重信と政党政治』第三章第二節・第三節。
- (16) 五百旗頭『大隈重信とその周辺』『早稲田大学史記要』第四五卷(二〇一四年)。
- (17) 五百旗頭『進歩政党 統治の焦点―犬養毅と安達謙藏』松田宏一郎・五百旗頭薫編『自由主義の政治家と政治思想』(中央公論新社、二〇一四年)。
- (18) 日本史籍協会編刊『大隈重信関係文書』全六卷(一九三二―一九三五年)(東京大学出版会、一九八三―一九八四年)。
- (19) 『尾崎行雄談話筆記』広瀬順晴編『政治談話速記録』第二卷(ゆまに書房、一九九八年)二五二頁。
- (20) 大隈宛山田一郎、一八八四年二月(二三日)『大隈重信関係文書』10、四〇―四三頁。
- (21) 大隈宛安武千代吉、一八九七年七月八日『大隈重信関係文書』10、二二六―二三二頁。
- (22) 大隈宛秀島家良、(一八九三年)八月二日『大隈重信関係文書』9、一一四頁。大隈宛江藤新作、(一八九三年)九月二八日『大隈重信関係文書』2、二〇―二二頁。
- (23) 大隈宛徳富蘇峰、(一八九四年)一〇月二四日『大隈重信関係文書』8、五十六頁。
- (24) 大隈宛徳富蘇峰、(一八九五年)四月六日『大隈重信関係文書』8、一〇―一一頁。
- (25) 大隈宛赤坂儀作、一八九五年一〇月二〇日『大隈重信関係文書』1、一三頁。
- (26) 大隈宛人見一太郎、一八九六年九月二四日『大隈重信関係文書』9、一一五頁。
- (27) 大隈宛大津淳一郎、一八九八年九月一〇日『大隈重信関係文書』3、五二―五三頁。
- (28) 大隈宛塩入太輔、一八九八年八月二六日『大隈重信関係文書』6、一六七―一六八頁。
- (29) 大隈宛角田真平、(一九〇〇年)二月一六日『大隈重信関係文書』7、三五〇頁。
- (30) 五百旗頭、前掲『進歩政党 統治の焦点』。なお、岡山県における犬養支持勢力が、国政レヴェルの民力休養論と県政レヴェルの積極主義とを使い分けていたと久野洋が指摘している。同『地域政党鶴鳴会の成立―明治期地方政治史研究の一視角』『史学雑誌』一二五編七号(二〇一六年七月)。

- (31) この点での高田・箕浦への高い評価を記した史料として、大隈宛井上彦左衛門、「一八九八年」一〇月二日『大隈重信関係文書』2、三十四頁。
- (32) 大隈宛大石正巳、「一八九〇年」一〇月二三日『大隈重信関係文書』2、二六二―二六三頁。
- (33) 大隈宛大石正巳、「一八九三年」十一月二三日『大隈重信関係文書』2、二六三―二六五頁。